みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

21世紀の民族学博物館の行方：機関研究：「マテリアリティの人間学」領域　民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究（2012-2014）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5529

PROJECT

21 世紀の民族学博物館の行方

文・写真
佐々木史郎

機関研究 ●「マテリアリティの人間学」領域
民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究（2012-2014）

問題の所在

本館に所蔵されている標本資料、映像音響資料など文化人類学・民族学の研究を推進するために必要な資料類をどのように保存し、情報化して研究資料あるいは展示として公開するのか、という問いかけは本館の創立以来の根本的な問題であった。否、そもそも文化人類学・民族学の研究を推進するための「資料とは何か」という問題がそれ以前に考えるべき問題としてあった。これは、さかのぼれば明治初期に我が国に「人類学」と呼ばれる分野が紹介されて以来、常に問われ続けてきた問題であったといっても過言ではない。では、そのような古典的な問題をなぜ今頃になって本館で「機関研究」として扱うことにしたのだろうか？

それは、20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて、文化人類学・民族学とその周辺分野の境界が急速に変化するとともに、それにかかわる研究者と研究対象、そしてその研究成果の利用者の三者の関係が流動的になり、改めてこの研究分野の研究対象を見直す必要に迫られているからである。そのような状況の中で、我が国における文化人類学・民族学の研究センターとして大量の標本資料、映像音響資料、文献図書資料からなる研究資料類を保有し、さらに新たに収集している本館としては、この根本的な問題に率先して取組む必要がある。

このような問題に取り組むとき、1 つの博物館や研究機関の中だけで悶々と考え続けても効果は上がらない。ほかに同様の問題意識を持つ博物館や研究機関と協力し合い、共同研究の形にすると、相互比較と新たな発想や視点の導入によって道が開けてくる。本機関研究ではその共同研究の相手として、ロシア連邦サンクトペテルブルク市にあるロシア民族学博物館（Российский этнографический музей）を選んだ。その理由は、両者とも「民族学博物館」を名乗っており、所蔵資料が「民族資料」あるいは「民族学資料」（それについては後で詳述する）であるからである。博物館としての歴史の長さ（ロシア民族学博物館が 100 年を超える歴史を誇るのに対して、本館はせいぜい 40 年に手が届くかという程度しかない）と、旧植民地あるいは支配地域以外の地域から収集した資料の有無（ロシア民族学博物館には旧帝政ロシアと旧ソ連の領土から集めた資料が大半だが、本館にはアメリカ、アフリカ、オーストラリア、ヨーロッパなど日本の植民地になったことがない地域で収集されたものも多い）に相違点は見られる。しかし、何よりも私が注目したのは、両者とも古典的な「民族資料」や「民族学資料」を中心に収集してきたという点と、自国の多数派であるロシア人あるいは日本人の文化を「民族文化」の 1 つに位置づけて積極的に収集し、他の民族文化展示とならべて展示している点である。そのような資料の収集、展示の方針を 21 世紀の今日どのように維持あるいは変えていくのかという点は、日ロ両博物館がともに取り組まなくてはならない問題である。

この小さな紹介文では、このような問題に取組む機関研究プロジェクトの基本方針を説明し、問題提起を行って、これ



ロシア民族学博物館正面（2012 年 6 月撮影）。

らからの議論を活性化させていきたいと考えている。

民族学博物館とは何か

「民族学博物館」あるいはそのように翻訳することが可能な名称を持つ博物館は世界に多数ある。しかし、その分布を見るとある偏りがあることに気づく。それは基本的にヨーロッパと日本であり、ベトナム、中国などアジアで近年見られるようになったものを除き、基本的に「民族学博物館」を有するのは、かつて植民地を支配していた国か、そのような国の一部で後に独立した国（ハンガリーやフィンランドなど）である。しかも、「民族学博物館」と名乗るのは、中欧、北欧、東欧、ロシアといったかつてドイツとオーストリアが中心になっていた民族学（völkerkunde あるいは ethnologie）の影響が強い国々である。これらの国々では人間の社会、文化的側面を研究する人文系の民族学と、生物的な側面を研究する自然科学系の人類学を峻別する。日本もそのような国の１つだった。「民族学博物館」と名乗る博物館は、後述するように、古典的な意味での民族資料や民族学資料を専門的に収集、保存、展示しているのが特徴である。

それに対して、アメリカでは人類学といえば、形質人類学や先史考古学から文化、社会研究まで包含する総合的なヒト／人間の研究を指し、民族学は文化人類学の一部とされる。また、イギリスでは社会研究に特化して、社会人類学という呼称が一般的になり、民族学という呼称はほとんど使われない。それに呼応するように、スミソニアンや大英博物館でも民族資料や民族学資料が収集され、展示されているが、それに特化しているわけではなく、民族学博物館とも名乗らない。イギリスやアメリカの人類学の影響が強い国や地域でも同様で、フランスでも民族学資料を扱う博物館が「民族学博物館」とは名乗らなくなっている。

日本の場合、「民族学」という名称に、戦前の植民地主義の色が濃厚な時代を連想させるものがあったことから、戦後は大学の研究室、学科、研究科などの名称に使われなくなった。2004 年に「日本民族学会」が「日本文化人類学会」と名称を変更した結果、今や我が国で「民族学」を名乗るのは本館と北海道民族学会ぐらいになっている。

ヨーロッパでも同様な傾向が見られ、歴史民族学（比較民族学）の中心だったウィーン学派やフランクフルト学派の衰退とともに、民族学という用語は使われなくなっていった。またこの名称が纏っている近代主義的、植民地主義的な香りも嫌われたのかもしれない。ただ、ロシア民族学博物館や国立民族学博物館の場合、有する資料の性格を明確に表す名称として他にふさわしいものがあるのか、という問題がある。日ロ双方とも「人類学博物館」あるいは「文化人類学博物館」と名乗ろうとしても、有する資料が現代の文化人類学の内容からすっかりずれてしまっているという現実がある。

民族資料と民族学資料

では、民族学博物館が収集保存する「民族資料」、あるいは「民族学資料」とは何なのか。

日本語の「民族資料」とは非常に茫漠としたことばであり、定義が曖昧で、学術的な概念といいうるものかどうかもあやしい。それに対して「民族学資料」というと民族学の研究対象あるいは研究に資する資料という定義を与えることができる。しかし、それは何かという問題がすぐに浮かび上がる。まず、後者から検討してみよう。

日本では民族学は文化人類学とほぼ同義である。ただし、日本の民族学もかつてドイツやオーストリアで栄えた歴史民族学の伝統を背負っていた。その特徴と盛衰については『民博通信』134 号の拙文で触れたので詳述しないが、その目的は文化史の再構成と文化圏あるいは文化領域の設定、そして文化の地理的分布や歴史的推移の一般法則を見いだすことにある。民族学資料とはこのような研究に資する資料を指す。

それに対して「民族資料」には先述のように明確な定義はなく、イメージ的かつ消去法的にその範囲が設定されている。しかし、従来それには必ず「伝統的」という修飾語を加えることができるものが多かった。したがって、どの民族あるいは社会の文化でも、たとえば、パソコンや携帯端末や車のように、世界的に均一で、大量生産される工業製品などを民族資料の範疇に入れることはなかった。

民族学は長らく、民族や社会が有する文化のうち「伝統的」と思われてきた部分に焦点を当ててきた。したがって、かつては民族資料と民族学資料は重なる部分が大きく、それらが「古典的」な資料といえた。しかし、経済のグローバル化に伴って、従来の「伝統的」な部分は急速に縮小し、また、歴史文書を駆使したより実証性の高い研究の結果、かつて「伝統的」と考えられてきたものが実は西欧との接触で発生したもの（伝統の創造）だったことが判明することによって、「伝統的」な「民族資料」、「民族学資料」という概念の基盤が揺らいできた。

従来、「民族資料」も「民族学資料」も、民族学という学術分野にとっては大きな意味を持つが、国や国民、あるいは民族や社会にとっての財産である「文化財」としての価値は認められてこなかった。しかし、20 世紀の間に「伝統的」といわれてきた文化の変容・縮小・消滅が相次ぐことによって、かつて文化財とされていなかった「民族資料」や「民族学資料」までが「文化財」と見なされるようになってきた。その結果、民族学博物館が収集保存すべき資料と、貴重な考古学・歴史学資料や洗練された工芸品などの「文化財」を扱ってきた他の博物館や美術館が収集保存すべき資料との境界が曖昧になってきているのである。

このような状況において、膨大な量の古典的な「民族資料」あるいは「民族学資料」を収集保存してきた民族学博物館は、今後いかなる資料を収集すべきか、さらにすでに収集保存している資料に対していかなる意味を与えるべきか、ということを問い直さなくてはならなくなっている。本機関研究は、かつて民族学の発展に資するために大量の資料を収集し、そして 20 世紀末に文化人類学・民族学の大きな転換期を経験した日ロの両民族学博物館が協力して、この問題に取り組むものである。

ささき しろう

先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学、特にシベリア、ロシア極東の先住民族の近現代史研究。編著に *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan*（Senri Ethnological Studies 72）。共編著に『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』（有志舎 2011 年）など。